

ふるむら
古村

さだよし
禎仁さん

札幌市 日測技研(株) 測量事業部測量調査課 主任



測量機器のトータルステーションで、測量を実践してくれた古村さん

未来を創る第一歩は、測量から。どんな建設現場もまずは測量から始まります。災害現場でも被災状況を正しく把握し、迅速に復旧するために欠かせない仕事の一つです。

日測技研(株)は、1953年に日本測量（現在の(株)日測、本社東京都）の札幌事務所として開設し、1982年に日測技研(株)として独立した会社です。同社で測量士として活躍しているのが古村禎仁さんです。（一社）北海道測量設計業協会が制作した動画「恋のトータルステーション」に、測量Boyzとして出演している古村さんを訪ねました。

大好きな数学を生かせる仕事を探して

奥尻町で生まれ育った古村さんは地元の奥尻高校を卒業後、江別市にあった札幌理工学院専門学校の測量工学科に入学しました。「好きな数学の知識を生かせる仕事に就きたい」と考え、見つけたのが測量士*でした。同校で2年間学び、先生の紹介で日測技研を知り、入社。「学校の先輩がたくさんいたことや、夏休

みのインターンで人間関係が良好な印象を受けたこと」がきっかけでした。

日測技研では、いろいろな測量の際に基準となる基準点測量や地形の測量、河川や道路などの計画や調査、実施設計に用いられる応用測量など、測量を業務の軸にしています。古村さんも河川やダム、地下埋設物の調査や用地測量などの現場を経験してきました。

「測量の仕事は、現場で距離や高さなどを測る屋外の仕事と、測量したデータを基に設計図などを書き起こす屋内の仕事があります」と古村さん。動画のタイトルにも採用された「トータルステーション」は、最もよく使われている測量機器の一つで、距離と角度と高さを同時に測ることができます。

トータルステーションによる屋外の測定作業は、ターゲットとなるミラーを取り付けたポールを垂直に持つ人と一緒に行います。「トータルステーションと対になるミラーを担当する人と呼吸を合わせて測定しなければならないので、コミュニケーションが大切です。ミラーを担当する場合は、最終的にその現場にどんな絵

*測量士 国家試験の測量士は、①試験を受けるか、②専門学校（現在、道内では札幌市の札幌工科専門学校のみ）を卒業し、実務経験2年以上で得るかの2つの手段がある。企業が学費を全額負担し、給与を支給しながら専門学校に通学させる企業委託生制度を導入している企業もある。

測量Boyz（右端が古村さん）が歌う「恋のトータルステーション」は北海道測量設計業協会のホームページ<http://www.hokusokukyo.or.jp/>からも視聴できます



を描くのかを考えながら立つ位置を決めます。平面図をイメージしながら立体的な構造物も想像する力が重要です」と、一見なんの変哲もないように見える測定作業も意外な難しさがあることを教えてくれました。

“縁の下の力持ち” 役だからこそ魅力

河川やダムなどの現場が多いという日測技研。古村さんも川の深さや地形を測る深淺測量や、ダムの底に溜まっている土砂を測る堆砂量測量などを担当してきました。「川やダムに極端に土砂などが溜まると洪水時に影響が出るため、取り除かなければなりません。だから定期的に調査しているんですよ」と、日ごろのメンテナンスでも測量は欠かせません。

札幌市内の定山溪ダムや豊平峡ダムをはじめ、留萌や十勝など、道内各地のダムの業務を経験したという古村さん。河川の測量では、「雪かきをして駐車スペースを確保することから始まる冬は大変」と苦労もあります。「前日まで降っていなかったのに、翌朝目覚めるとどっさり雪が積もっていて、膝くらいまで積もった新雪をかきわけながら、機械を持って川まで歩いたこともあります」と苦笑いします。

そんな大変な思いをしながらも測量の仕事が続いているのは「一般の人は、測量の仕事のことをあまり知らないでしょうが、何かを造るときに欠かせない、とても重要な仕事です。みんなに見えていなくても世のため人のために役に立っているという、そんな満足感があります。それがこの仕事の醍醐味^{だいごみ}なんですよ。縁の下の力持ちで、実は構造物を造る陰の立役者のような存在。測量にはそんな魅力があるようです。

若い世代に測量の仕事を知ってほしい！

7月1日に動画サイトYouTubeで「恋のトータルステーション」が公開されました。これは、古村さんを含む測量業界の若手4人で結成した測量Boyzが、測量の専門用語満載のラップ調の歌詞を歌い上げている動画です。道内で将来を担う測量の技術者不足が大きな課題になっていることから、(一社)北海道測量設計業協会が若い世代に測量の仕事に関心を持ってもらおうと制作したものです。同協会では、数年前から会員企業の35歳以下の職員を集めて講演会を開催するなど、会員企業間のコミュニケーションを図ってきました。2018年4月には札幌市東区のとどーむで大運動会を開催し、そこで運営を担った若手メンバーらが測量Boyzに^{ぼってき}抜擢されました。

らおうと制作したものです。同協会では、数年前から会員企業の35歳以下の職員を集めて講演会を開催するなど、会員企業間のコミュニケーションを図ってきました。2018年4月には札幌市東区のとどーむで大運動会を開催し、そこで運営を担った若手メンバーらが測量Boyzに^{ぼってき}抜擢されました。

「半ば強制的に出演させられました」と笑う古村さん。「正直言うと恥ずかしいです」と言いますが、そのクオリティの高さには驚いたそうです。公開後は話題を呼んで、新聞やテレビ、ラジオの取材などにも対応してきました。「測量という仕事があることを認識してもらい、まず興味を持ってもらうこと」という思いは、徐々に広がってきているようです。

古村さんは、子どものころに北海道南西沖地震を経験しています。東日本大震災後には建物の被害を調査するために現地入りしましたが、「ほとんど記憶がなかったのですが、東日本大震災後の現場で奥尻島もこんな状況だったのかと衝撃を受けました」と言います。古村さんは担当しなかったものの、水中を調査する測量機械で海底の地形がわかるため、車などいろいろなものが流されていた実情を知り、被災現場における測量の仕事の重要性も改めて認識したようです。

近年はドローンを活用して、危険な場所なども被災状況を迅速に把握できるようになっているため、新技術にも対応していかなくてはなりません。「まだドローンを使ったことはありませんが、いずれは経験してみたい」と意欲を見せます。

「主任技術者という立場になる機会が増えてきましたが、まだまだちょっとしたミスをしてしまうことも…。目標は、今以上に技術を磨き諸先輩たちに並び立てるような測量士になること」と、次の世代を担う技術者の一人として、その責任を果たしていこうという秘めた思いを感じさせてくれました。

「主任技術者という立場になる機会が増えてきましたが、まだまだちょっとしたミスをしてしまうことも…。目標は、今以上に技術を磨き諸先輩たちに並び立てるような測量士になること」と、次の世代を担う技術者の一人として、その責任を果たしていこうという秘めた思いを感じさせてくれました。